

河内小だより

平成22年4月27日 No.7

スポーツマンシップ ～ラウンジ～

- 土俵を割って力を抜いた相手力士に追い打ちをかけるのは、国技だ、横綱の品格だという以前にルールの問題である。これを無視したのでは、格闘技はただの殴り合いになってしまう。暴行傷害の疑惑に至っては論外である。
- 五輪選手は国の名誉を背負っているなどという前に、同じ種目の競技者達の代表である。自分が選ばれたので出場の夢を断たれた多くの選手がいる。技術や能力の差だと言えばそれまでだ。しかし、その無念を思いやって慎重に行動するのも第一人者の務めだろう。
- 一連の行動が品位に欠けると批判されてきた横綱が引退すると評価は一転し、強くて客を呼べる彼を惜しむ声が大きくなった。服装が問題にされた冬季五輪の選手についても、入賞した後は逆風の中でよくやったというムードに変わった。
- スポーツマンシップとなど古くさい、勝てばよく、目立つことが善であるかのような空気が社会に広がっている。学校の部活動についても、最近は商業主義の悪影響を指摘する声が小さくなった。それも個性だというのだろうか、勝利至上の風潮は子どもの心にまで及びつつある。
- 例えば野球で殊勲打を放った選手などは、決められたように握り拳を突き上げる。喜びの表現だけならともかく、時にはそれが相手選手やベンチに向けられる。教育の場である部活動で、相手に力を誇示するようなしぐさには違和感がぬぐえない。
- 昨秋、台風による大雨で河川敷にある運動公園が水浸しになった。休日や放課後に多くの小・中・高のチームが使用していたグラウンドに、多量のゴミが漂着した。毎日部活動で使っていたので、元通りにするのは難しくても皆でゴミぐらい集めよう、と誰かが言い出すだろう、指導するだろうと期待して待った。しかし、自治体の職員が片付けるまで、それは放置されたままだった。各チームともすぐに使える別の施設を探し、練習に励んでいたのだろうか。しかし、そこが部活動に使われていたのだと思うと、なんとなくわびしい思いがする。
- スポーツの目的の一つは勝つことだ、しかし、勝利至上主義や強者礼賛が行き過ぎてしまうと、敗者を思いやる気持ちが薄れ弱者を軽視する傾向を助長しないだろうか。社会の風潮に流され、豊かな人間性の形成という部活動の本来の目的を忘れたのでは、それを学校教育の一環として位置づける意義も必然性もなくなってしまう。

「内外教育 平成22年4月6日号」より

初めての給食1年生

13日(火)1年生の給食が始まりました。健康と体力向上の基本は食事と運動です。楽しい食事とともに、好き嫌いをなく、何でも食べられるようになれるといいですね。

